

## 特別寄稿

# 私と人間科学

谷川章雄

人間科学学術院 教授

## 1. 人間科学とは何か

私はこの数年、人間科学について以下のような内容の文章を書いたり、また話したりしてきた。

人間科学は、人間が直面している様々な問題に関し、多様な学問をもって総合的に取り組み、人間に関する「多様性」「総合性」「実践性」を追究するという方向性をもちながら、学問と社会をつなぐ思考の上に成立しています。そして、その根底にある「人間性の尊重」とは薄っぺらなヒューマニズムではなく、人間総体に対する最終的な肯定的見方ともいべきものだと思います。

これは、人間科学に関わる教員として積み重ねてきた経験を踏まえて発した言葉であるが、今に至るまでの私自身と人間科学の関係については、これまで述べる機会がなかった。したがって、ここでは編集委員会の求めに応じて、私のささやかな学問的遍歴をたどりながら人間科学との関係を語ってみることにしたい。

## 2. 考古学と民俗学の間

私は漠然とした歴史への興味をもって大学に入学したので、とくに考古学に対して強い関心を抱いていたわけではなかった。初めて遺跡の発掘調査に参加する機会を得たのは、学部2年生の秋のことである。千葉県館山市の江田というところの古代の条里制の遺跡に連れて行かれて、田んぼの中を泥だらけになって作業した。

私が考古学という学問を気に入ったのは、過去の人間の残したものに直接接触ることができたからで

ある。初めて弥生時代の竪穴建物跡を発掘したとき、土間のように踏み固められた床面上から、赤い顔料が塗られ文様が施された壺を掘り出したときの感動は、今でも忘れられない。それとともに、考古学の発掘調査から報告書作成までの作業は、一人ではできない多くの人々が関わる共同作業であることも魅力的であった。そうした世界は私の性に合っていたのである。

こうして私はその後もいくつかの発掘調査に参加することになった。その頃の私は考古学という学問の知識や技術、方法やもの考え方を知りたいと思っていた。しかしながら、この頃の私自身の興味は文化人類学や民俗学、古代史や神話研究などにも拡散していった。本来人間の好奇心は多面体であって、一つの学問の中に押し込められるような狭いものではないと思っていた。この考えは今でも変わっていない。

1年近く遺跡の発掘調査の経験が蓄積していくなかで、考古学という学問の本質が自分なりに見えてきたような気がしたが、それは同時にモノの研究の壁をなかなか突き破りきれない考古学の限界を感じることもあった。そうして、3ヵ月以上の長期の発掘が終わって、私は少し他のことをやってみようと思いつき、民俗学の世界に足を踏み入れることにした。私は生来フィールドに出ることが好きだったので、奄美や沖縄、五島列島の島々を長く旅した。そこで出会った古老から話を聞き、祭や行事を見たりしたことは、東京育ちの私にとって鮮烈な体験だった。五島列島の久賀島で見た農村の葬式の野辺送りはとても美しかった。1970年代の村には、まだ

伝統的な民俗の風景が残っていたのである。

民俗学は、一言でいえば、無名の人々の歴史を明らかにする学問であるが、それはその土地の人々の現在の生活に埋め込まれた、累積した歴史を実感し解読することに他ならなかった。しばらくして、学部の卒業論文のテーマを決める時期がきて、私は民俗学と古代史の間である大嘗祭をテーマに選んだ。大嘗祭とは天皇の即位儀礼である。その頃から私は牧歌的な村の民俗というよりは、習俗と権力の関係に関心をもつようになった。

卒業論文のテーマは決まったが、大学1、2年のときの遊び過ぎが祟って留年することになったので、また久しぶりに発掘調査に行ってみようと思った。この気まぐれな行動が私を再び考古学の世界に引き戻すことになる。約半年間に、千葉県市原市の集落遺跡と中世墓地、鎌倉の中世寺院などの発掘調査に参加した。このときの発掘調査の体験はとても濃密なものだった。また、そこで出会った大学院生など若き研究者の多くは、その後日本の考古学界を代表するような考古学者になっていった。夜に彼らが宿舎で酒を飲みながらかわす学問的な会話に、学生であった私はほとんど加わることができず、耳を傾けながら黙って酒を飲んでいたことを思い出す。私は発掘現場でとても多くのことを学んだ。

民俗学と考古学の間をさながら浮遊していた私に対して、私の恩師滝口宏先生はむしろ好意的だった。考古学は歴史学、文化人類学、民俗学の基盤の上に成立するものであるというのが、先生の基本的な考えだったからである。それは先生が育った大正から昭和初期の考古学の世界がそうだったからだと思う。かなり上の先輩から、考古学と民俗学の両方を身につければ「鬼に金棒」だと言われたこともあった。その頃の早稲田大学の考古学は自由な精神にあふれていたのだった。

大嘗祭をテーマにした卒業論文にとりかかった頃、大学院進学を考えるようになった。恩師から考古学か古代史のどちらに進むのかと問われたので、その場で考古学に行きたいと答えた。考古学の自由で開放的な雰囲気に魅かれていたからである。大学院修士課程の2年間、私は自分の関心のおもむくままに、発掘調査や民俗・民具調査など多くのフィールドに出かけた。この時点で拡散した関心を束ねて編み上げることはとても不可能であり、結局修士論文は卒

業論文と同じ大嘗祭で書くことになった。今思えば、考古学が1行も出てこない修士論文をよく通してくれたと思う。

このように私の学部から大学院修士課程の時代は、自分の関心にまかせて考古学と民俗学の間を彷徨しているような状態であった。博士後期課程試験の面接のときに、恩師にそれらを自分の中で統合しなければだめだと言われたのは、そのときに私の中に打たれた刻印のような言葉であった。

### 3. 人類史と自然史

狭山丘陵の北端に位置している所沢キャンパスには、お伊勢山遺跡と名づけられた遺跡がある。1987年4月の人間科学部の開設にあたって、校舎やグラウンド、体育館、プールなどが建設されたが、事前に工事で破壊される遺跡の発掘調査が行われた。遺跡の確認調査は用地買収以前の1981年春から始まり、1985年4月から1年余の間大規模な本調査が実施された。この発掘調査では、3万年前の旧石器時代の石器から江戸時代の建物や墓地まで連綿と続く、狭山丘陵に住んだ人間の生活の痕跡が発見された。

私にとって、このお伊勢山遺跡の発掘調査に参加したことは、人類史と自然史という新しい世界を知る契機となった。丘陵を浸食した谷部から、縄文時代および古代の植物化石を大量に含む泥炭層、中世のシルト層、近世の水田跡が見つかったのである。こうした低地の遺跡の調査では、土層の堆積状態やそこに含まれる火山灰は地質学、出土した植物化石については植物学、年代測定は化学の専門家の分析を依頼しなければならなかった。考古学は文科系の学問であり、私たちは自然科学分析の能力はもっていないのである。そこで、私たちは当時大阪市立大学理学部にいた辻誠一郎氏のグループを呼んで、一緒に谷部の低地遺跡を調査した。

私たちは彼らとの「共通言語」を習得するために、古環境の復元や年代測定に関する地質学、植物学、化学など自然科学の分析方法とその成果を一から勉強し、関連する論文を読みあさった。昼間は彼らと一緒に現場で発掘し、夜は酒を飲みながら様々な学問的議論をしたことは、とても刺激的な経験だった。同じ現場を見ながらも、彼らとは読みとる内容や方法、背景にある思考方法が全く違うことを痛感した。辻さんがこの発掘現場は学校であると言っていたの

をよく覚えている。私は自分の歴史を見る眼が人類史のみに偏っており、人類史と自然史との関係という視点が欠落していたことを思い知ったのであった。お伊勢山遺跡の谷部の調査によって、この地が平安時代にはモミの森林であり、それが江戸時代になって里山化したことが明らかになった。こうした環境との交渉の中で、狭山丘陵北端に住んだ人間の生活が長く営まれたのである。

その後、私たちは辻さんたちが立ち上げた植生史研究会に参加するようになり、私は依頼されて、植生史研究会の機関誌の巻頭言に以下のような文章を載せた。

19世紀の博物学は個別科学に分化、発展し現在にいたるが、ここで単純にかつての博物学の復権を主張することは難しい。なぜなら、私たちの立脚している個々の学問はそれぞれ独自の対象・方法・思考の形をつくりあげてきており、もはやそう簡単には統合できないものとなっているからである。仮に個人がいくつかの領域にまたがるような研究を志した場合には、自分の思考がそれぞれの学問によって引き裂かれていくことを経験するだろう。(中略) 確かに現在の考古学にとって、自然科学分析は欠くべからざるものとなっている。(中略) しかしながら、考古学と自然科学の間に存在する人間と自然の関係をどのようにとらえていくのかという根本の問題は、ほとんど議論されることはないようである。おそらく、人間と自然を分断せずに連続的にとらえ両者の相互作用を読み解いていくためには、自らの思考が分裂することに耐えながら、彼我の立脚している学問の特質と限界、方法・思考の差異を見すえて、個々の具体的な事例と格闘することから出発しなければならないだろう。道は遠く険しいのである。(『植生史研究』3-1,1995)

この文章を書いた後、辻さんから葉書もらった。そこには、これは「個人主義」であり、自分は何度引き裂かれても挑戦したいと書かれてあった。この文章は、学際的研究とは何かという問いに対する私の答えの一つでもあったが、そのあり方は辻さんのいうように「個人主義」に他ならないのである。そして、やや大げさに言えば、それはすぐれて思想的な営みにつながるものであろう。

#### 4. 近世考古学の世界

近世考古学は、日本考古学のなかでは新しく登場した分野である。1970年頃から近世考古学を体系的に構築しようとする方向性が生まれ、江戸遺跡の発掘件数が飛躍的に増加したのは1980年代中頃以降である。それは、1980年代後半のバブル経済のなかで都市の再開発が急激に進行し、東京の地下に埋もれている江戸遺跡が壊滅の危機に瀕していたことによる。現在でも近世都市の考古学は、開発と遺跡の保護・保存という厳しい現実と直面している。また、近世考古学は現代に近い時代を対象とするため、必然的に現代との関わり、すなわち現代との連続性と非連続性を考えざるを得ない。つまり、近世考古学は現代とつながる考古学なのである。

私が近世考古学の対象の一つである、近世墓標すなわち江戸時代の墓石に関心をもったのは、学部の学生のとぎである。鎌倉の中世寺院の発掘調査で当時大学院生だった河野真知郎氏に出会ったことがきっかけだった。河野さんは後に中世都市鎌倉の考古学の中心的な研究者の一人となる。その頃、河野さんは千葉県船橋市の墓標調査の報告書をまとめている最中で、現場のプレハブで夜に酒を飲みながら、彼からその調査の話聞いた。しばらくして、河野さんから送られてきた報告書を読んで、考古学にもこんな世界があったのかと近世墓標に強い関心をいだくようになった。いつか自分でも近世墓標の調査してみたいと思っていたところ、大学院修士課程のときに千葉縣市原市高滝ダム水没予定地の総合調査に参加する機会を得たのは幸運だった。この時の調査データをもとにいくつかの論文を書いたのが、私の近世墓標研究の出発である。

この頃の私は、近世の墓制の研究は考古学と民俗学が共有すべき課題であると思っていた。とりわけ、研究の蓄積が乏しい墓標は調査する必要があると考えていたが、一方で遺体が葬られた埋葬施設を発掘調査することについては、あまり関心がなかった。それは、民俗学の墓制に関する詳細な知見によって、埋葬施設についてはほぼ明らかになっていると考えていたからである。

ところが、1980年代の初め頃に、東京都心の建築工事現場から人骨が発見されて、教育委員会と一緒に立ち会う機会が何度かあった。そこは江戸時代には寺院墓地があった場所で、多くの人骨が大きな甕

の棺に埋葬されていたことを目にした。また、埋葬施設が一樣ではなく、石室をもつもの、木炭に覆われた甕棺、石蓋をもつ甕棺、火葬蔵骨器などバラエティーに富んでいた点も強く印象に残った。当初これらの甕棺墓が何かはまったくわからなかった。というのは、民俗学の調査データを見ても、東京やその周辺に大甕を棺に用いる習俗はなかったからである。埋葬施設のバラエティーがいったい何を意味しているのかも理解できなかった。それは、村落を中心にしたこれまでの民俗学の知見では、近世都市江戸の墓制を説明できないことを示していた。要するに、江戸の墓制は研究の空白の領域だったのである。

工事中の立ち会いではなく、江戸の墓地のきちんとした発掘調査を行う必要があると考えていたときに、たまたま新宿区の小学校の改築工事に先立って自證院という寺院の墓地を発掘調査する機会を得た。この調査が契機となって、江戸の墓制の考古学的調査・研究が大きく進展することになった。当初の疑問であった甕棺墓に葬られた人々は主に旗本などの武家であり、埋葬施設のバラエティーは被葬者の身分・階層の表徴であったことが判明したのである。

その後、私は東京の地下に埋もれた近世都市江戸の遺跡の発掘調査に関わるようになった。江戸城、武家屋敷、町屋、寺院、墓地、上水、下水など多彩な都市遺跡の様相が次第に明らかにされていったのである。そのなかで、私は近世史を専門とする歴史学者と一緒に仕事をするようになった。1990年の新宿歴史博物館の特別展「江戸のくらしー近世考古学の世界ー」に際して行われた講演会で、近世史の塚本学氏は記録や書類の上ではわかりにくい日常生活を示す資料として、近世考古学の発掘された遺構・遺物は大きな意味をもつと述べている。私は江戸の生活史を考えるとときには、柳田国男の『明治大正史世相編』『木綿以前の事』『食物と心臓』などがとても参考になると思っていたが、塚本さんも私の考えに賛意を表してくれた。考古学の世界に足を置きながら、民俗学的思考をあわせもって、習俗と権力の関係、モノと精神の接点を見たいと思っていた私にとって、近世考古学の世界はとても魅力的であった。

また、近世史の北原糸子氏と私たちは、江戸遺跡の調査報告書に遺構・遺物に関する考古学的な記載や分析、解釈とともに、遺跡地の歴史的背景を明らかにするための歴史学による文献調査の成果を収録

し、総合的な解釈を試みるスタイルを確立した。こうした考古学と歴史学が分析対象を共有する経験が蓄積していくことによって、お互いの思考方法の差異に気づくようになった。北原さんは、考古学が遺構・遺物といったモノとその周囲との関係性の中でモノへの分析に収斂してゆくのに対し、歴史学はモノと周囲との関係性を歴史構造一般の中に位置付けるという抽象化に向かう。考古学の個別具体的なモノに密着した発想が歴史学の盲点を突く、あるいは歴史学の内容をより実体的なものにしてくれる可能性につながると述べている。逆に考古学にとっては、それは遺構・遺物に立脚しつつ、歴史学のもつ抽象性を自らの中に取り込む機会を得ることに他ならない。私は、この延長上に考古学と歴史学が統合された世界があると考えようになった。それは、塚本さんが示した、歴史学、考古学、民俗学、民具学、人類学、生態学等の学問の境界を越えた、大きな全人類史あるいは全人類文化の研究の世界なのである。

## 5. 人間科学の中の私

以上のように、ここでは私の学問的遍歴をたどってきた。これをふりかえってみると、私は考古学と民俗学、自然史、さらに歴史学との間を彷徨しながら、最終的に考古学に足を置きつつ、その境界を越えて広い学問的な世界を形づくることをめざしてきたように思う。私は個別の学問に殉ずる気持をもったことは一度もなかった。

そうして、学際的、総合的調査・研究は、単に異なる分野の研究者が議論する参照の段階を超えて、それぞれの分野が分析対象を共有し協同する経験を蓄積しつつ、抽象的なテーマに向かって統合をめざしていくというのが、私のいづく統合への道筋のイメージである。このような私の思考は、これまで人間科学に関わるなかで醸成されたものであった。

加藤茂生氏によれば、19世紀末以降の人間科学の成立の歴史をたどると、ドイツ・アメリカ・フランスなどいくつかの潮流があるという（「人間科学の歴史的パースペクティブ」『人間科学研究』28-2,2015）。このことは、人間科学が時代や文化の中で相貌を変えて存在し、換言すれば、人間科学の世界は閉じた体系化されたものではなく、むしろ可塑性に富んだ開放的なものであることを示している。21世紀の日本において、人間科学の世界の再構築を企

図するならば、私たちは「個人主義」に基づく総合的な学問の構築とそれを裏付ける思想的な営みの中にわが身を投じなければならないだろう。そうした個々の思考が共鳴し変容し、かつ束ねられて編み上げられることによって、新しい世界が生まれること

を期待したい。要するに、人間科学とは生きた人間の学問であり、それは生きた人間である私たちが、生きた人間そのものを明らかにするという二重の意味をもっているのである。